

句集
八雲

句集

八雲



白
秋
時
本
門
記

辛
卯
年
八
月

句集・八雲 もくじ

柴田八雲さんの句に思う…………… 6

昭和四十三年…………… 9 昭和四十四年…………… 11

昭和四十五年…………… 19 昭和四十六年…………… 28

昭和四十七年…………… 37 昭和四十八年…………… 49

昭和四十九年…………… 60 昭和五十年…………… 67

昭和五十一年…………… 76 昭和五十二年…………… 89

昭和五十三年…………… 104 昭和五十四年…………… 117

昭和五十五年…………… 127 昭和五十六年…………… 141

柴田八雲さんを深悼す…………… 148

美わしき希望の星…………… 149

句集・八雲 出版にあたって…………… 154

柴田八雲さんの句に思う

句友 尼崎 てつお

柴田八雲さんの一周忌を迎えるに際しまして八雲さんの句集を編纂されとのことのお話を聞き、お子様方の親思、う心の深さに感動しておりますと同時に、俳句同好者の一人として心から喜んでおります。

山口市医師会の会員とその家族で構成する「棋野句会」に八雲さんが始めて参加せられましたのが昭和四十四年一月のことですから、少なくとも十二年以上の長きにわたり毎月の句会を通じての深いおつき合いが続いたことになります。

柴田八雲さんの俳句は何と言っても句の題材が非常に広範囲に及んでいることが特徴で、私共にも本当に良い勉強になりました。

仏教に関する句、茶道に関する句、旅行句、陶器に関する句、子を思い孫を愛する家庭婦人としての句、そして時には娘さんの様なロマンチックな題材までも縦横に駆使して一見奔放とも見える作品がある反面、やはり年輪を踏まれた独特の風格ある作品が多かったと思います。

ふだらくや南浄土の梅雨の空

蟬時雨倦みし写経の筆をおく

流灯の肩寄せ合ひて行く如し

水洩りの桶を借りての墓参かな

これらはすべて仏教に関連した作品ですが初心者にはとても出来ない句と思います。又

茶道に関する句としては……、

春の日は遅々たり茶席遅々として

青楓茶碗にうつし野点かな

初釜やなつかしき顔久々に

茶道に親しまれたせいか陶器に関しても御造詣が深かった様です。

窯ひらく便りのありて青葉かな

紅志野の茶碗贈ると春便り

古窯跡バス乗り換へて瀬戸の秋

旅行の句にもすぐれた作品が多かったと思います。

新春の宇治の瀬音の目覚めかな

京風味そとは北山時雨かな

青田果つ彼方月山雪残る

秋色の濃き倉敷の屋並かな

とかく病弱な八雲さんには闘病生活での作品もありました。

ほろ 苦き薬をのみて梅雨深し

点滴のキララキララと春の雲

キララキララの表現は心憎い程の表現と 생각합니다。

嫁ぎたる娘の舞扇春は行く

元旦に子等帰らざる世帯かな

孫来る障子に小さき影二つ

黄八丈裁ち切る音や春浅し

厨には春の山菜あふれいし

女性俳人としての面目躍如たるすばらしい作品と 思います。

若き日の本のページのクローバー

この様にロマンチックな作品もありましたがどの分野の句を見ましても花鳥諷詠に徹せられた八雲さんの句の風格がにじみ出ております。

そして昭和五十六年七月の棋野句会に八雲さん最後の投句が見られました。

夕暮れて夾竹桃の花白し

八雲

昭和四十三年

路地ゆけば猫よこぎりぬ春の宵

ひさかたにうらゝなるかな田芹つむ

にぶく光る波うちよせて砂丘水無月

ゆかた着て荷物かわせり宵の火事

台風すぎ吾子のひとみも清らなる

木犀や運動会のどよめく声

町はづれ歩みながらに月仰ぐ

(砂丘会)

昭和四十四年

かいまみる暖冬の庭に咲くつゝじ

秋の女さんごのかんざしきしてあり

この暮のせわしき布團手入れせず

たちまちにぬかるみとなり今日の雪

音にぶくハツパひゞきて冬の海

あけぼのをふくべにいけし茶室かな

お座敷のかゝりし妓ゆく春の路地

洞内の涼しさ闇の仄ぐらく（大峰にて）

枯野原はや若草の小さき芽が

小さき子のかけぬけ行けり枯野原

（砂丘会）

よる汽車の窓あけそめぬはつ御空

誰が染めし水仙の紅かなしけり

寒行の頭巾の女がえしやくせる

追灘式の舞台あられの音が打つ

椿花糸につなぎし日もありき

春さむや茶屋の甘酒うまかりき

野すみれのそよぎてありぬ馬場の昼

天草てんくさやはるかに干たり春の潮

僧堂の柳ゆれいる涅槃西風

童らあまた姿小さき潮干狩

青嵐茶碗にうつし野点かな

朝もやに山鳥啼きぬ袋掛

夏めきし山のみ音こだまして

柿若葉こゝら築地の塀多し

濯物重なりあいしながの梅雨

母公堂山気身に沁む夜明けかな

鈴の音小さくなりし母公堂（大峰にて）

山寺の萑粥の葉の細かりき

流灯の肩よせ合ひて行く如し

蟬時雨うみし写経の筆を置く

袂にて風おくりいる巫女ひとり

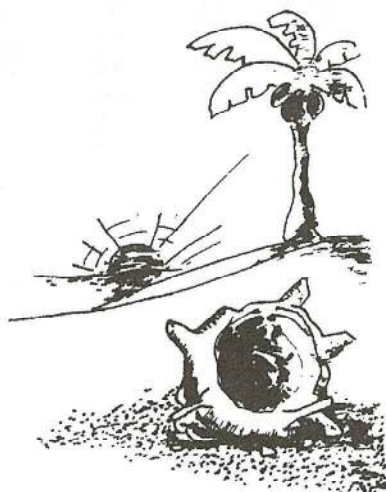
夏すだれ嫁となる娘を垣間見し

新涼やたんすあけいるなんとなく

秋暑し取り揃えたるのしの色

潮騒やきらめく港秋浅し

蘭陵王秋の海背に舞ひにける



布団綿このふくらみに陽のこもり

由来書きそへし茶室や初時雨

枯蓮田オブジェの如き配列に

山茶花の一片白し野点冷ゆ

初霜や人を見舞の荷の重く

短日や障子たちまちほの暗く

(榎野句会)

昭和四十五年

潮騒の彼方きらめく秋の灯

見渡すも島影みえず秋の雨

濃き色の潮うつまく紅葉かな

初弾きやさえし音色にあらねども

寒椿一度住みたき数寄屋風

軒ごとに豆まきのあり京の路地

野の梅や札所詣りの人の影

あわただし春の百花の咲き揃う

吹き渡る薰風ひかりある如く

蛙鳴く留守たのまれのひとり居や

クーラーをあきなう店や青田中

足早やに地下街を行く暑さかな

梅雨あけやこの名園もや、荒れて

台風の一夜明けたる後仕舞

お地蔵に施餓鬼の卒塔婆供えあり

ねはん像に蛇の羽バタキ音大き

山径のそこはかとなる秋の色

水引きの紅濃き葉月かな

秋晴れの高原車道空までも

秋の夜を郷土の舞に見惚れたり



(砂丘会)

処女雪や冴え渡りたる月の影

元旦や子等帰らざる世帯かな

思はざる人の名のあり賀状かな

軒毎に豆まきの声京の路地

何となく気の重き夜の炬燵かな

枝折戸の彼方に皐月^{さつき}手折らばや

すがすがし若葉若葉の大内山

入学のつき添ひ人のやゝすまし

雨に濡れし鯉干してあり寺の軒

露の束いだける浜の子頬紅き

病み上り目にしむ如き山つつじ

青梅の固き音して手より落つ

長雨や隣家の煙入り来る

若き娘等メロン食むなり華々しく

運び来し青梅雨に濡れてあり

繰り言のながきに倦みて枇杷をむく

裁ちものも縫ふ事もいや雨しとど

明月をいつまでも追う車窓かな

運転す娘の頬の残暑かな

廃校やグランドの芒ゆらぎあり

かそけくも人の気配す冬障子

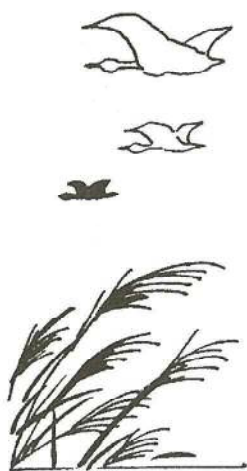
行く秋や老妓の面の悲しくて

いそぎ行くこの径猪の出ると云う

ストーブを寄せてくれたる通夜の人

白足袋のよごれ気になる師走街

山中の沼寒風にざわめきぬ



(樞野句会)

昭和四十六年

たなごころまでも染まりて紅葉山

とがりたる女の声す朝の霜

この土地に美妓多くして秋夜更く

露の臺そと掘り鉢に育てたく

寒菊の照葉色濃き薄茶席

山焼くや影絵の如き夜の古塔

春雨にしばし借りたる茶屋の軒

文豪の旧居のあたりバラ紅く

稲妻にはなしのつぎ穂途絶えたり

夏祭り見せ物小屋もなかりけり

土用入りひねもす梅雨の気配なる

銀扇をかざす袂の秋の花

秋空を見上ぐる人の瞳爽やか

鷹の爪手籠に盛りて来し女や

絵づけする素焼の皿や寒の入り

花簪かざしゆらぐ袂や初の釜

(砂丘会)

初釜やなつかしき顔久々に

木喰もくじきの木彫の笑みや寒の入り

初雪や径のぬかるみふみ迷ふ

新築の庭荒れしまゝ土筆よもぎ

忘れたる傘取り戻る細雪

銭のことにのみ云ふ老女春寒き

紅白の幕なまめきし春山門

黄八丈裁ち切る音や春浅し

この庭は土筆の列のならびいる

若き日の本の頁のクローバー

初孫はみめよくてあり桃の花

京彌生喰い初め碗を誂へし

上方の役者の名あり春の茶屋

春日は遅々また茶席遅々として

サイクリング魚籠などつけてうららかに

前後して舞ふ黄なる蝶羽の薄き



厨には春の山菜あふれいし

車窓には若葉若葉が走りゆく

窓ちかく青葉若葉の山せまり

友ありて築地のありて桐の花

桐の花まみえし友のや、ふけて

波のごと蛙の声や酒を酌む



津和野路や蕎飯こんにやく美味かり

曼珠沙華巡りめぐりて径はるか

彼岸花万歩の列の行くを見る

台風の去りたる後の濡れ畳

秋晴れや山の境を杖で指す

冬近し山路の五輪荒れしまゝ

山茶花の紅きにひよりの烈しくて

落葉たく煙まつすぐに人の声

歳末の賣出し父も子を抱きて

冬空に淡くかゝれる虹の橋

ヒレ酒にいさゝか酔ひし嫁が父

ふく旨しさらに好まし赤絵皿

昭和四十七年

二つ三つ青き蜜柑のなれるのみ

今晴れてまたくもりし冬の空

花の色茫洋として武者返し

連翹の花ゆれゆれで馬二頭

わが庭はペンペン草のみ白き花

列車すぎ宵待草のヒソと咲く

送り出す声をうしろに鮎の宿

白鳥のいづみ臨時の列車発つ

正月のドライブインの晴れ着かな

格子戸をくぐりぬけ来し年賀客

傘さして心経誦せし涅槃像

風に乗り汽笛近づく春の宵

大山蓮れんよくぞもたせし茶席かな

武蔵野の雑木林は明けやすし

螢袋白きもありて峠径

炎天下地氐りの泥除きいる

出水禍大工の手間もまに合わず

ゆるやかに烟のびゆくシオンかな

はいまわる孫とりかこみ松の内

得意気な炬燵の上の孫の顔

ローソクのあかりとぼしき寒の寺

初釜の席帰るさの大満月

(砂
丘
会)

節分に枳持ち帰へる女将かな

白足袋のしめりつめたき冬の雨

大寒の満月次第に蝕まれ

コンテナの届きし軒の春寒し

なかなかに捨て去りかねる春炬燵

春の笛枕辺うつゝきゝいたり

空の色うつして水のぬるみたり

青き踏む小さき足どりおぼつかな

友禅の如く散りしく落ち椿

石見路や草競馬あり散る花も

文とどき袂に入れし朧月

チューリップ花びらむしる幼き手



草競馬ラツキヨ畑の隣りにて

鉄線花百とせ生きて濃紫

はなの緒もしとど卯の花腐しかな

五月晴れ家に過ぎたる鯉のぼり

青葉かげ城の天守に牛草鞋ワラジ

朔日や榊の束の新芽かな

寝台車夜の短かし人の声

夏草の茂みに白き額の花

捨てられし七夕笹の色紙かな

混み合ひし清算所前台風下

油照り信号待ちの暑さかな

ひっそりと打水ありて京の路地

香水の瓶いろいろと女の子

夜具干せし竿たわみたる秋の朝

引き戸をばきしませている残暑かな

古典でも読み耽りたき夜長かな

孫達の訪れの報ながき夜

山また山その山間の秋の宿

くれないと紺色の傘秋の雨

蛇の目傘顔見たきかな秋時雨

冬の宿舞妓の簪かざしかなしくて

旅鞆持つ手も軽し小春かな

行きなやみただ紅葉を賞づるのみ

トラックに白菜リヤカー軒下に

糲がらのけむりかすかに霜白し

歳末に知り人多く小さき町

尋ね家の分らぬ仕舞ひ虎落笛^{もがりよえ}

我と共老ひたる障子煤払ひ

寄せ鍋を運ぶ女の紅襷

(榎野句会)

昭和四十八年

栗山はこの清流のかみと云う

ゆすぶれど青き栗の実落ちもせず

松茸のかほりはすれど羊歯の径

手帳よりハラリ落ちたる旅紅葉

粉雪に降り込められしいで湯宿

ふくらみを持ちたるような春の川

街角の鈴蘭すがれていたるかな

空梅雨に田面人影まばらなる

後を追うモーターボートの白き線

クーラーの音の気になるけだるさや

(砂丘会)

月明り新雪すべるスキーヤー

風花の肩にとどまりまた消ゆる

久方に針持つ心地四温かな

彌陀二尊もの云ひたげに春の寺

有難き彌陀を拝して春の浦

浅みどりうつして流る春の川

碗のふたあければ菜の花蕾たる

雨傘の持ち帰りたる花数片

スカンポの列つづきたる垣根かな

夏めくや子を呼ぶ母の弾む声

病床を一族見舞ふ立夏かな

黒南風や修学旅行の気になる娘

国訛り遣いわけいる立夏かな

空梅雨や苗代真直ぐのびいたり

ホロ苦き薬を服みて梅雨寒し

重たげな籠のうちなる青き梅

公害の公聴場の蒸し暑さ

枇杷の実の幼児と共に転がりぬ

夏祭踊子大地に坐りこみ

夏祭り踊りの列の小休止

あおぎ見る銀河もけむり夜涼かな

銀行の人も揃ひて踊り来る

何事か罵しり合える残暑かな

夕焼けを背にして走る童かな

真白なる航跡あとは夏の海

裁ち損ねしばし思案の暑き秋

漣の千々に碎きて今日の月



待宵に連れの気になる茶席かな

秋扇かざして語る路傍かな

たゝみ方教へて蚊帳の別れかな

水引の白きもありて彼岸会や

孫に来る蚊を追ひやりて秋団扇

蚊を追ひてゆるみ加減の秋団扇

遠方の友も交へし運動会

待宵や花は童の土産物

蹲踞つくばいの水も冴へたる今日の月

植へもせで咲きたる庭の野菊かな

受付に群がる外科医朝寒し

朝寒や大学会の席づくり

針麻酔講演もあり秋日和

アルバイト神妙顔の秋学会

弁当の不足さわぎや秋学会

秋色の濃き倉敷の家並かな

朝寒き大原館の婦女の俑ゆわ

障子をば破るつもりの小さき顔

活花の展示時雨の窓を打つ

孫来る障子に小さき影二つ

苦勞せる友とも見へず霜の朝

なかなか苦詠櫓の炬燵かな

霜月や浮世の絆断つ作家

天目の茶碗もありて紅葉かな

昭和四十九年

川ぞえに若葉萌えたつ柳かな

いさゝかに背高くのびしつくしかな

春雷におもわず針を落としたる

花御堂釈迦童顔におわします

街筋に繰りいで給ふ花御堂

誦経やみあとの静けさ白椿

白山の頂き白く青葉風

波立ちて渚あわれや風青く（能登にて）

竹の子を掘りかねている娘かな

夏祭り女の易者軒かげに

踊り手はバイトなりけり夏祭り

寒灯や切符賣場に影もなく

一寸をきざむこの列初詣

むつかしき税務の話寒に入る

占ひは大吉とあり春を待つ

春なれば百花五弁の花開く

(砂丘会)

おみくじを枝に結びて春を待つ

小さき指手折りし梅の薫りたる

山椿色濃き径を神籠石

アカシヤの花の揺らぎて能登の旅

梅雨寒や旧家の土間の仄暗く

文豪の碑のあたりなる桜んぼ

博多帶締めてけだるき半夏生

月見草女妖しく見られける

夕焼や汚れて戻る童たち

施餓鬼あり木蔭に残る暑さかな

昼寝せる児等累々と並び居る

動かざる蟬爪弾けば羽ばたきぬ

雲の峰背負ひし峠越しにける

朝寒や電話に通ふ師の訃報

灯明のもとにしめやか回向菊^{えこう}

乙女等の御前演奏秋の夜

学会の役受け持ちて菊花かな

点滴の注射まどろく秋の雨

菩提寺に母の名のあり茸の籠

藁灰のぬくき火桶に手をかざし

年の瀬の街灯掃除されいたり

時雨では又はれやかに山の肌

(榎野句会)

昭和五十年

出雲路や風舞ひ昇る二つ三つ

終着の帰省子を待つ花の冷え

夜桜に女の帯のなまめきて

先帝祭太夫の髪に風光る

友禪に染めても見たき若葉かな

砂利トラのバイトもありぬ夏休み

七夕や不思議な恋のほしき夜

落ち栗や逝きし弟はいくつなる

母を追い泣きやまぬ子や秋暑し

弟を偲び手向けの毯の栗

(砂丘会)

サービスのつもり炬燵の玩具かな

木枯風や門の前なる孫二人

つま先のおぼつかなくて春の雪

長唄の師匠の小部屋猫柳

老妻の還暦祝ひ猫柳

そのかみの名妓もづくを賣りに来る

ピアノの音片手弾きなり猫柳

春愁や格子戸もれる京訛り

観音の靈験ききつ若葉徑

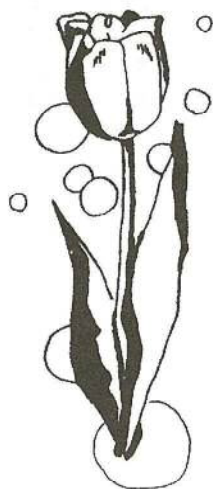
童等の群り登る若葉道

願懸けて通ふ清水若葉寺

行春や旅立ちし子の着きたるか

螢火の甦りたりこの川に

ミニ早苗机の上に置かれけり



迷ひ来し螢掌のうち明滅す

土地を買ふ話蛙の声しきり

スカンポの道を園児の列の行く

螢火や遠くの人になつかしき

夏木立梢に月をふくみたる

七夕の短冊可愛ゆき願ひごと

水洩りの桶を借りての墓参かな

造成の宅地の彼方雲の峰

秋立つ田雀威しの轟きぬ

大買物日傘邪魔なる重さかな

盂蘭盆会無縁墓にも灯一つ

台風下悲鳴の如き汽笛かな

氷のうの溶ける早さや油照り

秋の旅誘ひの電話吾病みて

松虫や背負ひし孫の重さかな

麻の蚊帳もの珍しくたゝむ娘等

測量の男等の靴野菊かな

おでん炊く匂ひただよう夜寒かな

風邪に寝てほこり気になる畳かな

七五三六才の子の連れだちて

齡とはかゝるものかや初時雨

左手の手袋ばかり残りたる

(榎野句会)

昭和五十一年

柴田勝子 改め

翠彰となる

童らの声ゆき交うる刈田かな

病して菊の見舞いも受けにけり

花嫁のお色直しや菊薫る

測量の男等野菊踏まず行く

時雨きてほとほと足りぬ金勘定

すがれたる背をもつ女冬の雲

冬雲や固くとぎせし女の唇

動くとも動かざるとも冬の雲

いそぎ往く冬雲も往く広きみち

凍雲や小包配達され来る

箸紙に寿の字をえがきけり

孫たちを抱きて目出度き年酒かな

故郷の自慢話に年酒酌む

謡曲となつて年酒の盃を置く

春寒や一針ごとに想いこめ

遠足の仕度こまごま水溫む

水溫む流れの田芹青きかな

対岸も花ものどけき渡しかな

翅をとじて風に耐えいる白き蝶

薰風の吹き去る如く柳史の画

都忘れ一夜の雨に咲き揃う

春宵や博士となりし吾子の肩

クラス会宿の浴衣で寮歌かな

術終えし輸送車の人梅雨冷ゆる

格子戸のうち音もなき夏簾

サクと裁つ糊ほどのよき浴衣かな

(砂丘会)

吉小吉みくじ見較べ今朝の春

絵かるたや孫に教へる得手の札

風揚げの糸子供等にゆずらざる

残雪やローカル線の鉄路かな

入園の仕度こまごま水温む

車をばよけて柳の新芽かな

菜の花と海の蒼さの車窓かな

菜の花や船頭ひとり客ふたり

菜の花や出雲の女のつゝましく

葉桜や転倒したる三輪車

葉桜や遍路煙草を吸ひいたり

葉桜の幹つながれし仔犬かな

青葉雨吉備津の釜の巫女老ひし

窯ひらく便りのありて青葉かな

引越の荷物到来梅雨晴間

青葉かげ飛龍の滝を拝すなり

掌のうちの天道虫を見せに来る

抜歯せる頬おさへいて半夏生

歌姫の汗手弱かに拭ひけり

夕焼を背に釣人の影戻る

同病を相憐みて麦酒抜く

天の川今宵流星しきりなる

杉並木梢銀河をさへぎりぬ

立話男西瓜を抱きしまゝ



峯に入る行者草鞋を確かめつ

エレクトーン聞えずなりて天の川

ひぐらしや昼を灯して古き寺

上げ潮に流灯岸に片寄りぬ

秋風にリズム伝へて運動会

唇に葡萄一粒海を見る

孫達の立ち去りし夜の長きかな

垣間見し瓢箪一つみのるのみ

しめやかに雨とはなりぬ夜の長き

写経する朝のひととき鴟の声

姥ひとり堀に凭れて秋の風

秋風の吹き抜ける路地質屋かな

何も彼も昔のことよ冬紅葉

片時雨さけて語らふコーヒー店

秋日和きようフイレンチエに旅せるか

武蔵野の落葉ふかふか山の径

どんぐりを拾ふ旅人吾れもまた

時雨来て心せかるゝ蔵仕舞

昭和五十二年

アトリエも義兄も老いたり秋灯下

玻璃の戸を敲くがごとき鴉啼きぬ

冬紅葉寺のきざし荒れしまゝ

石切場すみに残りし冬紅葉

冬の女追悼釜を懸くと告ぐ

女装せるカルメンも舞ふ忘年会

中国の星占いやクリスマス

大鰯や冬の湖の匂いする

師走の夜酒汲み交す暇あり

舞初めのはねて影なき楽屋かな

初詣で宮司は笛の名手なり

筆初め先づかの君に書かばやな

穏やかな障子のあかり書初むる

うづたかく春菊の束運ばれ来

古老らの梅の噂や二月堂

寒明けや若きに頼る齡となり

水っぱき苺の味や寒明くる

寒明けや嫁の手編の春シヨール

雛のごと並びているの孫達は

花蕾む婚とゝのひてあはたゞし

降りやまぬ春雪花屋のブーケかな

春雪や園児らの声賑やかに

看護士が話題となる日松の花

入学や隣りの席は同県人

試歩の身に頼母しげなる桐の花

崩れ塀右に曲れば柿若葉

砂掬ふ伊那佐の浜の卯月寒（出雲にて）

八雲たつ風土記の丘のさつき空

バラ展で待つ言伝てのありし朝

夕陽の映えしコルベン薔薇を挿す

梅雨寒やいさゝか微熱体温計

くさむらに吐息のごとき螢かな

波の如その街騒の薄暑かな

青嵐最上の川の舟くだり

歩みてはしばし思考の蟻の顔

七夕や園児らの手のお星様

峯降る白衣の肩の濡れいたり

清滝の流れビールに堰かれをり

逞しきドイツ娘や大ジョッキ

峰入りに懷中電灯午前二時

炎天下スーパーカーの好きな児等

妖しくてやがてはかなき大文字

水指しに映す手はずの大文字

大文字夜の季節を区切るかな

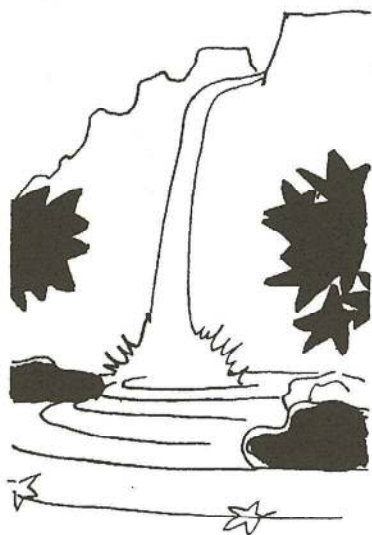
秋の蝶稲の穂波は遙かなり

秋の蚊に弁当の座は替りたり

菱採りの女いさゝか年増なり

きこゆるはせゝらぎのみや秋の水

(砂丘会)



春待ちの朝寿美酒の届きたり

書初めの孫なにごとか呟やきて

初潮やその煌きの迅きこと

マンションの廻り階段春一番

婿となる人の電話や春の宵

引越の家族預る菜種梅雨

嫁ぎたる娘の舞扇春は行く

畳屋の畳持ち去る寒もどし

春光やおつむてんてん上手な児

入学や列はみだせし子もありて

武家屋敷白木蓮の大樹かな

青田果つ彼方月山雪残る

掃き去ると知らで小蟻は一系列に

街騒の波と伝はる薄暑かな

庄内の平野青田にはてもなく

歩むよりすべもなき道炎天下

あげ潮に磯の香のこして夏の橋

カンビールどつとあふれて新幹線

若やぎて鬼灯市を行き戻り

蕪粥の一碗やつと暑氣中り

白萩のこぼれし門を去りかねつ

放生会緋色の法衣秋の水

彼岸花運動会の戻りらし

つれ戻す子を背負ひての刈田道

獅子頭並びて稲穂たわゝなり

旅の秋里の祭りに逢ひにけり

古窯路バス乗り替へて瀬戸の秋

時雨降る新幹線の客まばら

身障の娘の嫁ぎゆく小春かな

柚の男の花嫁迎ふ小春かな

玉鋼燃えさかる冬焰のむ

(榎野句会)



昭和五十三年

メルヘンの小人眠るや末枯野

杣径のせばまりてあり末枯るゝ

大正の頃のなつかし末枯るゝ

野竜哭く大陶壁の冬落日（唐九郎作）

山茶花の精ひそむかや詩仙堂

冬紅葉みやげに重しきらら漬

横顔をみせて黙して冬の機ハタ

冬紅葉肩逞しき禪の僧

鈴虫の孵るさわぎや冬ぬくし

クリスマス浄よしこの夜のいとぬくし

寸劇の天使わが孫クリスマス

年毎に華やかさ増す破魔矢かな

洋風の黄なるはまたも落下せる

追焚きをたのみほどよき初湯舟

立春の今日より厄のあけにけり

肌荒れて化粧映えせぬ春の風邪

宇治十帖瀬音に春の定まりぬ

雪解風頬かむりして老師さま

扉開き春風のごと見舞客

木芽時微熱おぼゆる癖ありて

壺坂やむかしながらの炭火にて

紅の花ルート遙かなエジプトよ

早り田の畦にたむろす農夫たち

夕顔や仄かに磯の香の流れ

朝顔が垣根にゆれてブランコも

暁天に紅もゆる流れ星

吾れもまた老いとなりたり冷奴

昏れなずみ秋風漂よう神体山

地蔵盆われも接待の客なりし

ある日ふと雲の流れに秋をみる

石仏も童も草も夕焼色

夕焼けに溶けこむごとく和舟漕ぐ

さやけしや人みな黙しおにわふみ（大社にて）

原稿の纏らぬまゝ、夜の長く

民藝の窯場稲穂のさ中なり

里神楽えんえんとして秋暑し

やや帯のさがりたる児にお年玉

新春の宇治の瀬音の目覚めかな

紅志野の茶碗贈ると春便り

陶壁の紅志野ほのか春浅く

(砂丘会)

如月や大陶壁の野竜哭く

点滴のキララキララと春の雲

フルートの大合奏よ涅槃ねはん西風にし

すねている児は入園の列はなれ

遅き日や塵紙交換車遅々

快方にむかふ病舎の揚雲雀

意外なる人芸達者花見酒

もめごとの一段落や竹の秋

ミニ鯉のこゝも端午よ大団地

葉桜や札所の古堂解かれあり

地図を手にたづぬる町の薄暑かな

花嫁の衣装に耐へし薄暑かな

句碑ありて仰ぎ見るかな大新樹

五月雨の激しきさなか救急車

青嵐の肌寒しとも羽黒山



繁盛も昔語りよ鮎の宿

水不足畦に屯^{たむ}ろす農夫たち

軽やかにボンと音たて蓮ひらき

遠花火ちいさく童の声もして

病棟の窓を行き交ふ夏つばめ

赤飯の接待もあり地藏盆

駅までは遠し野の道虫の声

秋日射し黄瀬戸の肌も温もりぬ

秋の灯に千々に乱れし文読みぬ

茶の花の白ひそかなる坂の径

京風味そとは北山しぐれかな

山門に大根干してありにけり

千歳飴紅の一つをくれしかな

荒れ墓地に野菊乱れてありしかな

落葉してインテルサット見え初めぬ

柚子の味噌つくる気配の厨かな

(棋野句会)

昭和五十四年

柴田翠彰 改め

八雲となる

黄瀬戸なる小皿いく枚秋日射す

山麓めぐればヌツと紅十五夜

仏彫る楠のかほりや冬日射し

顔見世の弁慶若手役者なり

四条より二条へ歩む京師走

くず切りの甘さひとしき冬の旅

雪国の男 鰯酒に酔ひしれて

関門の潮みおろし鰯の酒

一月も半ばたちけり店は閑

飾焚き灰は火鉢にうつさうか

雪乞ひの噂もありてスキー場

湯煙りの立ちのぼる空初明り

狂ほしく柳枝乱れて涅槃西風

旬想ねるつもりが午睡あたゝかや

春の宵灯すに惜しき暮色かな

青春の想ひたぐりつ青き踏む

空しくてうつろ心や余花に逢ふ

ピクニック家族連れなる子供の日

餡入りの粽小粒に珍らしき

奥高野水かけ地蔵へ青嵐

海月刺す海よと母は嚇かしつ

汽笛きくSL試車か梅雨晴間

蚊帳の環いさゝか錆びて残りけり

野仏の供華なる花が彼岸花

神樂たつ太鼓の音や秋の空

ふと目覚むいで湯の窓に初茜

旅に出て見知らぬ神に初詣

薬局の水仙かほり分包機

(砂
丘
会)

踊り初め八十路の女の立姿

如月の寒天を切る居合抜き

五人目の孫男児にて春可祝

立春や早やも土筆を摘みてあり

貴妃の艶葉桜となり庫裡静か

建賣りに領地しつかと菜種畠

春愁や選挙の連呼遠くきく

関門の潮絢爛先帝祭

古寺の秘佛開帳柿若葉

鐘の音や人の列行く柿若葉

惜しげなく手折りくれにし牡丹かな

石楠花のおくれ花なり奥高野

京鹿子花の風情の娘なりしが

見おろせば田毎の青き深まりつ

甚平が車で迎ふ大夕立

雲の峰背にして吾の棟上ぐる

麻の蚊帳忘れられいる納戸隅

白扇に円相のみを書き給ふ

万燈会降らねば行きてみあかしを

鵜飼の火花街つきしところより

夕焼や外科医の肩の疲れかな

黒蝶の横切る空間秋の色

秋雲を僧侶と見上ぐ六地藏

満月や寺門を出でし山の端に

稲刈りや白き手拭ひ一つ見ゆ

理趣經の身に沁みわたる秋の暮

ひとさしの白きを籠に曼珠沙華

秋の灯やふとかの友のなつかしき

(棋野句会)

昭和五十五年

白秋の歩みし道の秋桜

神楽たつ里の祭りの栗の飯

日の本は不思議の国よ神の留守

七卿にゆかりの宿の茸かな

き、酒に首かしげいる新酒かな

納骨の土掘るしじま風花す

ひとり身となりし姿の初鏡

宝石の店のぞきみる四温の日

春風邪で休校の孫遊びに来

亡き夫の座位そのまゝに春炬燵

抜きかけの大根のあり霜畑

絵踏する人の心の寒さかな

春の川碧き淀みに石投げて

ピーカーにつくし活けいるナース達

落ち椿首にかざして遊びし日

朧夜の語りつきせぬ過ぎし日を

葉桜や葉の重りてゆれいたり

筍の白子門辺に届けあり

緋牡丹や青磁も籠もよくうつる

牡丹散る舞の風情に似たるかな

植えものを植えかえ算段日永かな

螢とぶ河辺佇む静かなり



螢ひそむ窓辺の茂みコーヒーの色

小雨ふるラ・セーヌの窓辺葉桜の頃

宝塚の唄口づきみ牡丹園

緋牡丹や青磁の壺に端然と

栗林栗の花咲く山辺かな

高速道虹に向いて馳せすゝむ

青嵐くゞりて涯の空ひらく

関門の潮眼下に夏座敷

よき友と綾とりし日よ暮かぬる

望月に向いて疾し高速道

傍の笑顔の人やねむの花

ラ・セーヌと云う名の喫茶柳の芽

いけ垣の根もと茗荷の芽を見たり

アルバムの友なつかしき秋の夜

滴りのみ仏となり鐘乳洞

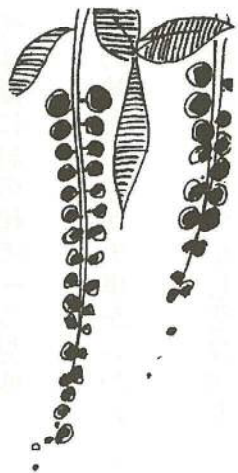
つま先の蝌蚪俄かに横切りたり

敬老の日の佗しさや古時計

秋の灯や障子にうつす指人形

小さくとも螳螂鎌を持ちおりぬ

綾絲を藍色に染め山眠る



(砂
丘
会)

やぶ蔭に紅の椿の一つ見ゆ

あの時もたしか矢車からからと

葉桜の並木なつかし想ひ出も

掃くこともしばし忘れむ八重桜

一輪の香にむせぶ夜や白牡丹

神の山若葉青葉の日和かな

朝露に苺摘みけり今日も晴れ

孫たちの籠いっぱいの苺かな

古き家の跡とも額の花咲けり

来年の種まく話竹の秋

栗の花白くゆらぎて山の径

梅の実を摘む梢より声のして

今もぎし細きおくらをきざむ音

遠花火庭の花火もまたたのし

初盆会いまも昔の盆提燈

竹竿でもぎ取る葉つきの柚子数個

秋の灯やこゝは山家の二つ三つ

秋さやか台風去りし次の日に

掌のうちの栗ぬくもりでいたるかな

夜も更けて窓打つ音や秋の風

しつくい壁のしめりや秋日和

栗の実の一粒落ちてつやゝかな

西の京秋を彩る文化祭

秋の女珠数まさぐりて寂かなる

あけびの実はじけていたり秋の風

小春日のぬくもりを背に縁広し

針に糸長きをたのみ小六月

七五三ちよつとおすまし連れ立ちて

姥逝きて四十九日や石露の花

朝寒や衿立て急ぐ通勤者

(棋野句会)

昭和五十六年

珍らしく松茸のあり茶碗蒸

朝寒や山門出づる僧の傘

タンカーは白き波立て冬海峡

友の家は人里離れ風花す

疾走のライトに燃えし曼珠沙華

苺はみつ籠にみつ、朝光さやか

結露せる玻璃戸越しなる焚火かな

峰々は眠りつ團地建ちす、む

女剣士の隊伍を組みし薄暑かな

白靴の揃えてありぬ京の土間

特訓の応援團や炎天下

(砂丘会)

初夢も見ずに日出度き朝かな

山里に雪見をかねし牡丹鍋

年玉の袋ならべし孫の数

雲の間に春雪連峰はるかなり

鶯の音色サービス小さき駅

豆撒くや鬼面の声は大いなる

野鳥啼くさ霧にこもる早春賦

囚に居てすなほな句作柳の芽

啓蟄やまこと小さき天道虫

小皿なる白魚あはれおどり食ひ

妻恋ふる囚人の句や春の月

花冷えやライト消えにし五重の塔

夜桜や朝参禅せし身にも

辛夷花道のうねりに見えかくれ

四月とは祝儀袋のいることよ

楊貴妃の花も盛りの画帖かな

雑草も花いっぱい春撩乱

庭に出て子の散髪や青葉蔭

看護婦と讃美歌うたふ朧月

梅雨雲の晴れ間ひと筋那智の滝

南紀ふだらく寺にて

ふだらくや南浄土の梅雨の空

古寺の紫陽花哀し濃紫

滝つ瀬のとどろき渡る青嵐

愛らしき水着干しあり午後三時

新しき茅の輪くぐりて詣でけり

撥の音の洩るゝ垣根や黄蜀葵

ランドセルころがっており夏休み

夕暮れて夾竹桃の白き花

(権野句会)

柴田八雲さんを深悼す

燃えつきて天に帰りぬ曼珠沙華

佐々木のお彦

露の世や今日句の友を失へり

潮 活子

秋燈下友失ひし日の句会

尼崎薫女

秋の旅戻れば君の訃報とは

尼崎てつお

(山口市医師会報第5巻10月号)

美わしき希望の星

友人 安部 武子

柴田八雲先生のお亡くなりになられた報に接し、先生と何等かの御縁があった方々は心からおしみ、まっ先に思ったことは希望の星が消えた！ということでしょう。

常日頃もの静かなお人柄だっただけに表面には波風をたてずに、それぞれの心の中に何かを与えて逝かれたことに、心の底から今大切な大きなものを失った哀しみに嘆き悲しんだのは事実であります。

燃えつきて天に帰りぬ曼珠沙華

権野句会の佐々木先生から同行の縁にて八雲先生の死をおしまれての句として伺ったことがあります。

こうしたある日御家族の中から句集の話がもち上がりました。すばらしいことであります。草葉の蔭の先生もさぞかしお喜びのこととごさいます。この意義ある句集の出版に当たり、友人としてこの私があとがきを記すという光栄は何にもまして嬉しいこととごさいます。

昭和四十三年から十三年間の長きに亘る句作で、発表された「樸野句会」「砂丘会」のそれだけでも七百三十六首の多きを数えます。

秋の灯やここは山家の二つ三つ

友の家は人里離れ風花す

亡くなられます三年前頃から好んで訪れられた菅内山荘（先生がそう呼んでおられた）には句の材料俳画の素材が山積しているかの如く多い日には数首の句が詠まれました。

古き家の跡とも額の花咲けり

先生は紫陽花の薄紫の色がお好きでした。最後となった大阪薬科大学のクラス会へ出席のため南紀を旅行された六月に詠まれた句では、

古寺の紫陽花哀し濃紫

ふだらくや南浄土の梅雨の空

あと三ヶ月の余命が詠まれていたのか、いとも、もの哀しく紫陽花がお心にうつったのにちがいありません。帰られてからの先生は何かにせきたてられておられた様に、ある時は御先祖様のルーツをたずねられ萩へ三度、津和野へ二度と御熱心になさね歩かれました。「不都合がないように」「まつりごと」を正して、たしかめて廻られたのでした。

神の山青葉若葉の日和かな

菅内山にある愛宕神社へ参拝した昭和五十四年九月二日から私と先生との親交が始まりました。私が退職後郷里菅内に帰りましてより、よく同道して参り、先生のお人柄にふれる機会も多くなり、その御信仰心の厚さ、御人徳の高きに、しばしば胸打たれていました。

関門の潮眼下に夏座敷

傍らの笑顔の人やねむの花

門司、めかり神社の前にある沈潮閣に掖済会病院院長 田坂巖先生の招待をうけた時詠まれたのでございます。その時の先生は薄緑の和服姿がより美しく、生来知的でどこことなくしゃんとされた容姿には人々に品格の高さを感じさせるものがありました。

その年の七月、薬科大学同期の堀江ナツ子女史に会われて、同女史の勤務先であり私の在職中の掖済会門司病院に薬局見学を兼ねて研修に來られました。その時すでに先生は六十五歳であられました。が声をかけることも出来ない程真剣な白衣姿は科学の人でありました。人間は幾才になろうと勉強ね！と全身で教えておられるようで深く感銘いたしました。

その夜のめかり山荘での先生方はまるで学生時代にもどられた様でした。校歌が出る、寮歌あり、「あの人はどうして？」又「あのお方は？」と友の消息に話は尽きません。そのうちに宝塚が飛び出し、我先にと「春日野八千代」が出る、「水の江滝子」が出ると言った感じで並居る私共まで湧かしてしまわれました。こんなに楽しそうに、心の底からはしゃ

がれた先生のお姿を拝見するのは始めてです。心豊かな学生時代がしのばれ、本当によかったと嬉しくもなりました。

死の床、御臨終の迫り来る数分前、はげまし、みまもる御家族や縁者の方々に對し、靜かに目を開かれはつきりとした口調で言われました。

「私の人生はすばらしかった。しあわせでした。」「みなさまありがと。」と。御自分の命のきわをさとられたそのやさしいお声に周囲から、すすり泣き、感涙にむせぶ声が、徐々に大きくなり、それがいつのまにか御生前よくうたっておられた出雲の国の唱歌のやさしい静かな合唱となったのです。

行こうよ　行こうよ　きれいな姫のすんでいる。出雲の国へ　行こうよ。

実に実に美しいしあわせな御最後でございました。大内時代の姫君の御最後もかくあるものかと悲しみの前に先ず感動がわき出てきました。そしてその莊嚴さに心からうたれ、このようなお方に再び相まみえることができない事を悟らされ、初めて大きな悲しみが私の胸の底からわき出てまいりました。

俳句の中によく出ておりますとおり、素直で清らかなお人柄、そして何事にも真面目であられました。おやさしいお心の中を余り人目に出されず、そっと、そっと、といっ

た風で人々の心に感じさせる、そんな先生を皆心からご尊敬申し上げておりました。

こうしておりましてもお美しいお顔にお上品な笑みをうかべて、小さなお口で何かを語りかけておられますお姿が、今も目の底に焼きついて離れません。

先生と御交際のあった皆様方も、きっと同じ思いでしょう。この句集と共に、いついつまでも心の中に生き続け、後世へと語りつがれることをございましょう。すばらしかった柴田八雲先生の足跡を眺め心からその偉大さをたたえて後々の手本としたいと念じて止みません。

(昭和五十七年九月九日記)



句集・八雲 出版にあたって

柴田 眼治

母は昭和四十三年頃から本格的に句作を始め、「砂丘山口支部」と「山口市医師会榎野句会」の同人として、四季の折々にふれては投稿していた。雅号は初め「翠彰」をもらっていたが、昭和五十四年より「八雲」に改めている。

「や雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣作る その八重垣を」と須佐男命が櫛名田比売を迎えて詠まれた古事記の中の一節から「八雲」としたという。神話のふる里、出雲への憧憬は強く、出雲大社はもちろんのこと、その裏手にある八雲山や八雲の滝とか、「八雲たつ出雲風土記の丘」を訪ねたり、八束郡にある神魂神社や熊野大社へも参拝している。

母の両親は子宝にめぐまれず、紀州の那智熊野権現に願をかけて生まれた長女であつたために母は大事に養育された。又一方で幼少より舞踊、茶道、華道

に琴、三味線と習い事をやかましく躰けられたようだ。さらに山口という土地柄もあつて古きよき日本の伝統芸術に対する審美眼は素人ながら、高かつたように思う。塗り物や茶器の手入れは、ことさら丁寧でその取り扱いにはやかましかった。しかし学生時代は阪南の帝国女子薬専（今の大阪薬科大学）の山岳部に属して紀泉アルプスを登ったり、六甲から宝塚あたりも、よく遊歩して、活発な面もあつたという。

父と結婚後は敗戦後の苦しい時代を子育てと、診療の補助におわれて、「たおやめぶり」を発揮するどころではなかったようだ。晩年、ようやく、磨かれた素質が発揮しはじめた様に思われる。俳画は赤松柳史先生の御指導のもとに、時間を作つては絵筆をとつていた。

なくなる三ヶ月前、薬専の同窓会で勝浦にゆき、熊野三山から那智の滝を巡つて、自分の出生の神仏へお礼参りができたところこんでいた。

ふだらくや南浄土の梅雨の空

と南紀の補陀洛渡海のお話を偲んで詠んだ句は生と死の予感が汲みとれる作で

ある。那智に生まれて、出雲へ還る。大和国の日の出と日没の地を愛した母らしい一生と考えられ、今は八百万の神々のみ許へ召されて、さわやかに、またなごやかに暮らしていると信じている。

このたび母の一年祭をむかえるにあたり、その偲び草として句集にまとめて、神前に供えることができるのは、家族一同の大きな慶びであり、母も喜んでくれるものと思う。

句集の発刊にあたり、おつきあい頂いた砂丘および樺野句会の皆様には感謝の意を表します。又、とくに選句の労をたまわり、また玉稿を賜わった尼崎哲郎先生、題字及び口絵を快く引き受けて下さった下村青花先生、そして句の浄書をして頂いた安部武子氏には厚く御礼申し上げます。

母の一年祭にあたって

昭和五十七年九月二十七日記

句集・八雲

著者 柴田八雲

発行者 柴田眼治

柴田輝明

・題字 下村青花

・カット 柴田やす子

印刷所 (有)小郡印刷

初版 昭和五十七年九月三十日

再版 平成九年六月三十日

三版 平成十六年七月三十一日

(非売品)

